

「日本美術の裏の裏」・生活を彩る美“愉しみ方”

日本画や着物など展示

サントリー美術館（東京・六本木） 2020.09.30～11.29

本展は、当館の「リニューア・オープン記念 II」として開催される催事で、日本人はこれまで室内装飾や身の回りの調度品を美意識の表現の場としてきたが、近年、日常生活の中で身の回りの調度品や障子に畳などが姿を消している。

そこで、古来培ってきた生活を彩る美の愉しみ方に焦点をあてて、当館所蔵の日本画、焼物、調度品などをユニークな6章構成として紹介している。



伝 土佐広周《四季花鳥図屏風》 1429年(室町時代) 六曲一双 紙本着色
椿、梨、菊、梅、薔薇、牡丹などの花木や草花を季節に沿って取り合わせ、その間に飛翔し木に羽を休める小鳥たちを描いた作品は、中国・民時代の花鳥画に学んだもので、異国の花と鳥が題材となっている。また、ブロックを並列させた空間が印象的で、襖絵などには春夏秋冬が同時に織り込まれ、現実にはありえない風景が出現するように、日本絵画が生み出す独自の“空間”を紹介している。

円山応挙 《青楓瀑布図》 1787(天明7)年 一幅 紙本着色



画伯の55歳時の作品で、画風は写生を重視した平明な写真性を特色としている。画中には、人の背丈を凌ぐほどの大画面に、勢いよく一直線に流れ落ちて滝壺で飛沫を揚げる流水が描かれて、轟々と音を立てるかのような流水に流れる岩の塊は黒々として静かである。

こころもち見上げた「青楓」と、正面から見た豪快な「滝」、俯瞰から見下ろす「波」という三つの視点があり、垂直に落下してくる水流が滝壺で岩にくだけて飛沫となるまで、一幅の絵の中に時間の経過を感じさせる涼しさが印象的である。